
ノール（M） 「『デオフェアリー・ノールと秘密の部屋』

スメル6 『二硫化メチル』」

一拍の間

ノール（M） 「わたしの名前はノール。どこにでもいる、普通のデオフェアリーなの！この世界から悪いにおいをなくすため、カルモア学園の学生になって、人間の世界を見守っているんだ」

SE…ノックの音。

SE…ガチャ！とドアが開く音。

エリカ 「おはようございます、お姉様！」

ノール（M）「この、ノールのことを『お姉様』と呼ぶ騒がしい子は、後輩のエリカ。実はデオフェアリー候補生なんだけど、ノールと一緒にカルモア学園で消臭の任務についているんだよね」

ノール「じゃっじゃっん！」

エリカ「今週はなんでしよう？」

ノール「今週はダメなひとには見えない割烹着」

エリカ「ああ、いよいよ昭和を隠さないことにしたんですね」

ノール「昭和じゃないっ！最後の授業が家庭科だったの！」

エリカ「何作ったんですか？」

ノール「カレー作った。美味しかった」

エリカ「あー、いいですねえ。何カレーですか？」

ノール「淡路島のタマネギを丸々一個使ったカレー」

エリカ「カレー祭りで、気に入った一皿の再現ですね」

ノール「カレー祭りって、なに？」

エリカ「いや、なんでもないです」

ノール「なんだかわかんないけど、エリカ、MCで結構噛んでたよね？」

エリカ「絶対、分かってますよね、お姉さま!？」

SE…ノツクの音

ノール「むむっ!？」

エリカ「きました、かね？」

ノール「今週も、アーリー・バスメル・タイムか」

エリカ「どうしますか？」

ノール「やっつける！」

エリカ「え!?! いや、それは…:まずくないですか？」

ノール「番組の広告設定はR18だから、多少のバイオレンスは

大丈夫！」

エリカ「そういうことを言っているんじゃないやありません！」

SE…ノツクの音

ノール「よし、ノールがドアを開けるから、そしたらエリカが
やっつけるんだよ！」

エリカ「あー、もお！ わかりましたー！」

ノール「はいはい、今あけまゝす！」

SE…ドアを開ける音

エリカ「——らぶらぶ・ぽっぴんぱんっ!!」

SE…超必殺技の音

えり「うわあ!?!」

エリカ「え?」

ノール「あれ?」

一拍の間

えり「いきなり、なにをするんですかあ〜!？」

エリカ「あれ!? バスメル王子じゃありませんよ、お姉さま！」

ノール「(少し間を置いて)いきなり、何をするの!？」

エリカ「えっ!? だって、お姉さまがやっつけろって……」

ノール「というか、部室で超必殺技を炸裂させるの禁止！」

エリカ「スママセン、悪臭じゃなくて王子だと思ったので、

直接打撃で攻撃するほうが、いいかなって」

ノール「悪臭に対しても、毎回こんな感じだよね!？」

一拍の間

えり「あのう……いいですか？」

ノール「ごめんごめん、人違いしちゃったみたい」

エリカ「なんのご用ですか？」

えり「入部希望です！」

ノール「え!？」

エリカ「どどどどういことですか!？」

えり「え？消臭部って、ぶかつ、ですよ？」

ノール「あ、そうだ。ここ部室だったよ、そういえば」

エリカ「そういえばって……お姉様、メインタイトルを

ないがしろにしないでください」

ノール「じゃあ、あなたは新入生……ですか？」

えり「はい、そうです！」

一拍の間

エリカ「4月にすべりこみセーフネタですね」

ノール「もう一週間早く気がつくと、もっとよかったね……って、

ばかー！」

エリカ「まあ、来週は放送お休みですし」

ノール「現実と物語のけじめをつけようよ、ちゃんと！」

エリカ「いまさらですか？」

一拍の間

えり「あ、あのお……」

ノール「あー、ごめんごめん！ えっと、名前は？」

えり「えりっついていいます！ よろしくおねがいます！」

エリカ「へ？」

ノール「えり？」

えり「はい」

ノール「かぶるじゃん、エリカ」

エリカ「もろかぶりですよ！」

えり「あの、先輩のお名前は？」

ノール「わたしの名前はノール。どこにでもいる、普通の……」

部長

えり「ど、どこにでもいないとおもいますけど……よろしく

お願いします！」

ノール「あぶないあぶない。いつもの調子で自己紹介しそうになっただよ」

エリカ「いつものヤツも、つつこみどころ満載ですからね」

ノール「で、こっちが後輩のエリカ」

えり「えりです、エリカさんよろしくお願いします」

エリカ「あ、よろしく……って、どうしましょう、名前かぶってるの流されましたよ？」

ノール「まずいね。食われるのはエリカのほうだもんね」

エリカ「何ですか!?! こう見えても、メインパーソナリテイですよ!」

ノール「では、姿が見えない駄目な人たちに補足してみよう」

一拍の間

ノール「まず、見た目が——小柄で、細くて、童顔で、ツインテール」

エリカ「あ、あざとい……」

えり「細くないです。すらっとした長身美女になりたいです」

ノール「えり、身長は？」

えり「あ、う……140センチ、くらいです」

ノール「140センチ弱、と」

えり「にゃあー……かかとある靴をはけば、なんとか

140センチですー」

エリカ「あ、あざとい……」

ノール「で、ここが大きなポイント——胸がない！」

えり「にゃあ！ あります！ ないと呼吸できませんっ！」

エリカ「なるほど……ひんにゅー仲間ってことですね」

ノール「仲間ってゆーな！ えりよりはある」

えり「えうく……」

エリカ「言い切りましたね、お姉様」

ノール「KEI先生ファミリーの中でも、あの双子よりも胸が

あるから、みんな納得」

エリカ「おこられますよ！ というか、双子の片方は男の子です

よね!？」

ノール「でもなあ、駄目な人たちは、えりみたいにロリっと

してる方が好きだからなあ（ため息まじり）。

ノールみたく、女性の魅力にあふれてるタイプだと、

逆に不利だったりするんだよねー」

エリカ「……すみません、素であっけに取られて、ツツコミを

わすれました」

ノール「どういふことかな、エリカ？」

エリカ「いえ、セクシーダイナマイトですね、お姉様（棒読み）」

ノール「なにはともあれ、気に入った！ 入部を許可する！」

えり「ありがとうございますー！」

エリカ「結局、名前はかぶりっぱなしですけどね」

ノール「ニックネームとか、つける？」

エリカ「どーせ、ひどいあだ名だから、いいです」

ノール「そんなことないよ。『技のデパート』とか、どうかな？」

エリカ「そんなあだ名、いやです！」

一拍の間

ノール「じゃあ、パトロール行こうか」

エリカ「はい、お姉様！」

えり「あの……」

ノール「なにかな？」

えり「ここは……何をする部活なんですか？」

ノール&エリカ「「えーーーーっ!?!」」

ノール「知らないの!?!」

エリカ「むしろ、何のきっかけで来たんですか!?!」

えり「ふ、ふぁく……名前イメージから、おもしろそうかな
って」

一拍の間

ノール「どうしよう、エリカ？　もしかしたら、変な子かもしれ
ないよ？」

エリカ「もしかしなくても、変な子だと思います」

えり「えうー……」

ノール「学園内の悪臭の元を探して、消臭する……　こんな感じ」
えり「なるほど。どうやって、消臭するんですか？」

ノール「それは、華麗にへんしん！でおど」

エリカ「（上にかぶせるように）このスプレーでしゅっしゅっ！

って、消臭するんですよ!!」

えり「ふぁー、そうなんですわね」

一拍の間

エリカ「（押し殺した感じで）いきなりバラして、どうするんですか!？」

ノール「嘘は良くないよ、エリカ」

エリカ「嘘も方便です！」

一拍の間

えり「それで、どこに行くんですか？」

ノール「裏庭あたりに、いってみよー」

エリカ「はい、いきましよう！」

えり「はい、ついていきます！」

SE..ガチャ、とドアが開く音。

一拍の間

SE..歩く音 (F.O.)

エリカ「だいぶ、あたたかくなりましたねー」

えり「ぽかぽかですー」

一拍の間

ノール「……おや？」

エリカ「お姉さま、ギョウザ食べましたか？」

ノール「ノールじゃないよ！ エリカは毎回ノールを真っ先に
疑うよね!？」

エリカ「いや、家庭科の授業でギョウザカレーを作ったとか」

えり「おいしそうですねー」

ノール「つくんないよ！ 煮込んだらギョウザがバラバラになる

し、餃子のタネにカレーのルーが勝っちゃって、餃子が

入ってるのかどうかよく分からなくなるし、皮の食感も

台無しになるって、実際に作ったかみじょーから聞いた」

エリカ「そんなこと、作る前にわかりそうなものですけど」

えり「それで、この美味しそうないいにおいは、どこからして

くるんでしょうか？」

ノール「いいにおいじゃなーいっ!!」

えり「はわーっ!？」

ノール「これは……悪臭だよ！」

エリカ「ニンニクのいやなニオイだけ、みたいなニオイですね」

ノール「このニンニクのニオイに似た悪臭……キャベツを野菜棚

に放置して腐らせて、その汁からわき上がるような強烈

な悪臭……」

えり「うう、そんな冷蔵庫の中を想像してしまいました……」
ノール「そんな嫌な悪臭成分……どこかに、二硫化メチルがある
はずだよ！」

一拍の間

ミチル「汁ってなんだ！ この……ばかフェアリー!!」

SE…それっぽい登場SE

ノール「だれ？」

エリカ「嫌なんですかね、汁？」

えり「手に付いたトコ、想像して嫌ですよ」

ノール「うわ、それは嫌だね」

エリカ「リアルで悲鳴あげそう……」

ミチル「だから、キャベツの腐った汁を掘り下げるなーっ！」

エリカ「で、どちら様ですか？」

ミチル「わたしは悪臭17人衆のひとり……『二硫化メチルの

ミチル』っ！」

一拍の間

エリカ「二硫化メチル!? デオアリーナで、硫化メチルと

ごっちゃになって、ぐだぐだになることがある、あの！」

ノール「なんの話？」

エリカ「えり、これが悪臭だよ！」

えり「そうなんですか？」

ノール「スルー？ ノールの疑問を完全スルー？」

一拍の間

ミチル「だいたい、腐った汁が容器にたまるほどキャベツを放置

するって、あり得ないっ！」

ノール「でも、そういう時の悪臭だって、かみじょーが言ってた」

エリカ「あー、上城は自分の車でやらかしたらしいですね」

ノール「バーベキューの残りをトランクで放置してたら、大変なことになったらしい」

エリカ「夏場ですからね。キャベツが入ったビニール袋の底に、

出所と本体が不明な液体が、たまっていたとかなんとか」

ノール「ちよつと考えれば、出所も本体もわかると、ノールは思う」

えり「あう、ちゃんと片付けましょうよう」

ミチル「もう、汁の話は終わり!!」

ミチル「ニンニク臭の主成分っていうと、そのころりつ子が

言ったとおり『美味しそうな悪臭』って表現がピッタリでしょ!」

エリカ「美味しそうな悪臭って、どうなんですかね?」

えり「おいしそうなら、良いにおいですよ」

ノール「そもそも、悪臭防止法の参考資料に『腐ったキャベツのようなおい』って、書いてあるから」

ミチル「もお、あつたまきた！ こうなったら、学園全体を
わたしのにおいで満たして、キャベツを連想するか、
ニンニクを連想するか、学園アンケートを実施するしか
ないよねっ！」

ノール「そんなこと、させないんだからっ！」

ノール「華麗に変身！ でおどあーっ!!」

SE・変身SE&BGM

ミチル「あー!? でたなーっ!!」

ノール「見た目はキュートに、中身は本気！デオフェアリー・

ノール！」

一拍の間

えり「かっ……かわいいっ!!」

エリカ「えっ!？」

ノール「何で驚くのかな、エリカ？」

エリカ「すみません、自分に嘘はつけませんでした」

ノール「嘘も方便って、自分で言ってたじゃん！」

えり「ちっちゃくて、かわいいっ！」

エリカ「良かったですね、お姉様」

ノール「ていうか、あっさり変身しちゃったけど、いいのかな？」

エリカ「もう、手遅れですから気にするのやめましょう」

えり「欲しいです！ どこかで買えるところあるんですか!？」

ノール「欲しいって、あのね、ノールはモノじゃないんだから」

エリカ「（上に思いつきかぶせる感じで）カルモアダイレクト

と、あとは株式会社カルモアのホームページから取扱店
をチェックすれば……」

ノール「現実と物語のけじめをつけようよ、だから！」

一拍の間

ミチル「もしもーし？」

ノール「なに？」

ミチル「なに、じゃなくて……わたしをバカにしてるのかな？」

ノール「してない、してない」

ミチル「そうかな？」

ノール「だって、バカにしたって言ったら、いくらバカでも

バカにされてるのがわかって、傷つくじゃない？

だから言わない。たとえバカ相手でも、ノールは空気が

読めるやさしい子だから」

ミチル「バ、バカにするなーっ！」

一拍の間

エリカ「でも、今回は割烹着からエプロンに変身なんですね」

ノール「そうだね。家庭科って感じ？」

エリカ「いや、なんか団地妻って感じですね」

ノール「団地妻!? ノール、生活に疲れた感じじゃないよ！」

エリカ「そんなわけで、番組では『団地妻ノールお姉様』のイラストを 募集します！」

えり「採用された方には、特製の『団地妻パッケージ』のノールをプレゼントしちゃいます！」

ノール「募集しないよっ!! あと、カルモアさんに断り無くプレゼント企画立ち上げちゃ、ダメだから!!」

えり「かるもあさん、よろしくおねがいします！」

ノール「しないからねっ!!」

一拍の間

ミチル「あー、もおー！ 怒ったぞ！」

ノール「え？ さつきからずっと怒りっぱなしじゃん」

エリカ「あきららかに、お姉様が原因ですよね」

ミチル「うるさあいつ……生ゴミのニオイを、臭塗ッ!!」

SE…臭塗っばいSE

エリカ「うわ！キャベツの腐った汁のニオイがーっ！」

えり「えーっつ、目にしみそうですー」

ノール「具体的なイメージは、やめるっ!!」

ミチル「あははは!! 法令で、特定悪臭物質に指定されるほどの威力は、どう？」

エリカ「よくわからないけど、凄い感じですね」

ノール「22分の1のくせに、えばるなー！」

えり「ふぁー、どうするんですか？」

ノール「こんな時は……エリカ、やってしまえ！」

エリカ「お姉様みずから、えりにお手本を見せてあげたらどうでしょうか？」

ノール「まずはエリカがお手本だよ。このマイクログルの

ボトルでバシっつと！」

エリカ「はいはい、わかりました！」

エリカ「でよ・でよどやー!!」

SE..打撃音

ミチル 「うわあ!？」

エリカ 「どうだあ!？」

ノール 「こらーっ!! 握りしめたスプレー缶から、変な衝撃派を

出して敵をやっつけるの禁止っ!!」

エリカ 「見た、えり!? 消臭剤マイクロゲルの威力を!」

えり 「ふわあ……実戦空手道と、消臭スプレーをくみあわせた、

まったくあたらしい格闘技ですう……」

ノール 「格闘技って、何!? それより、エリカはスプレーの噴射

ボタン、押す気ないよね!？」

一拍の間

ミチル 「あいたたた……ひどいよ、こんなの……」

ノール 「ほら、いたがってるよ、エリカ?」

えり 「はうく、かわいそうです……」

エリカ 「消臭は情け無用、そしてルール無用! 最後にお姉さま

が、血も涙もないテイストでトドメを!」

ノール「エリカには、ルール設けた方がいいと思う。
……とにかく、いづくぞー！」

一拍の間

ノール「デオ・デオドアーっ!!」

SE…デオ・デオドアーのSE

ミチル「うわー、だめだー!! (棒読み)」

SE…悪臭退散のSE

ノール「やったあっ!？」

エリカ「やりましたね、お姉さま」

えり「おー、すごいです」

ノール「……うん、ニンニク臭はしないね」

エリカ「汗の匂いはなくなりました」

えり「し、しる……」

ノール「これで、消臭完了っ！」

エリカ「じゃあ、帰りましょうか」

えり「はい！」

SE…数歩、歩く音

一拍の間

バスメル「おお！ノールちゃんじゃないか!？」

ノール「うわあ!？」

バスメル「今日は新しい子と一緒になんだね。　ますますキミの

美しさが際立ってくるよ」

エリカ「なんか、言ってることが地味に失礼ですね」

ノール「いつでも代わるよ、エリカ」

えり「はわ、どちらさまですか？」

一拍の間

ノール「そんなわけであ……（やる気なさそうに）」

ノール「この、いきなりうっとうしい、キラキラ二枚目のお兄ち

ゃんは『バスメル王子』」

ノール「別にアラブかどこかの王子様ってワケじゃなくて、

ニツクネームってヤツ？」

ノール「なんでか知らないけど、ノールのことを妙に慕っていて。

何かというと、つきまとってクサイ台詞で口説こうとし

てるんだけど。ノール、クサイ台詞って大の苦手なんだ

よね」

一拍の間

エリカ「あの、お姉さま……考えていることが、声に出てます

けど？」

ノール「今日はえりに説明だから」

えり「はー、王子様ですかあ」

ノール「様、いらぬ。王子でいい」

一拍の間

バスメル「綺麗な瞳だね。『流れ星ってどこにいつちやうん

だろう?』って疑問の答えが、やっと分かったよ」

ノール「理科の教科書読めば、すぐ分かったのにね」

エリカ「相変わらず、容赦なく一刀両断ですね」

一拍の間

えり「はわー、ろまんちっくですな。聞いているだけで、

照れてしまいます(照れ)」

ノール・エリカ「「えーっ!?!」」

ノール「ちよつと、しっかりしなさい! だまされるよ、

そんなんじや!」

エリカ「そうですよ！ 駄目な紳士達が、手ぐすね引いて待ち構えてるんですから、しつかりしないと！」

SE…携帯の着ボイス音

バスメル「……ああ、すまない。行かなくてはいけなくなったよ」
ノール「はい、さようなら（棒読み）」
バスメル「では、またあおう！ 恋のシューティングスター!!」

SE…歩く音（F・O）

えり「流れ星は、ノール先輩の瞳になるんですねー」
ノール「だいたい、大気の摩擦熱で燃え尽きるらしいよ」
エリカ「燃え尽きずに、落ちるのもありますよね」
ノール「そういうのは、なんとか流星打法で打ち返せばいいんじゃないかな？」

えり「ほえ？」

エリカ「お姉さまは昭和だから、気にしないで」

えり「ふわぁ……そうなんですか」

ノール「エリカっ!？」

SE..鋭いスイング音

エリカ「うわぁ！ お姉さまこそ本気で攻撃してくるの、やめて

ください！」

ノール「までーっ!!」

SE..走る音 (F. O.)

エリカ「やですーっ！」

SE..走る音 (F. O.)

えり「はわっ！ ま、まっってくださいー」

S E .. 走る音 (F. O.)

一拍の間

バスメル (N) 「こうして、二硫化メチルは消臭された」

バスメル (N) 「しかし、これで終わりではない」

バスメル (N) 「ニンニクの臭いの元はひとつではない、生ゴミ

もしかり……」

バスメル (N) 「新キャラエリは、一体なものなのか？ 消臭

部の貧乳率が高いのは、何故なのか？」

バスメル (N) 「デオフェアリー・ノールの、消臭は終わらない

……」

一拍の間

バスメル (N) 「漂う悪臭を、なんとする」
バスメル (N) 「芳香剤では、ごまかしきれぬ」
バスメル (N) 「換気扇でも、どうにもならぬ」
バスメル (N) 「マイクログルで、消臭する」
バスメル (N) 「また、来週も……」
ノール (N) 「『デオ・デオドアー!』」

おわり。